

○ 若林農相が再登板、「異常事態だが農政の停滞許されない」と抱負

遠藤武彦前農相の辞任により、後任として前環境相の若林正俊参院議員が4日、農相に就任した。若林農相は、赤城徳彦元農相が8月1日に辞任してから、8月27日の内閣改造まで環境相と農相を兼任していたが、わずか1週間での再登板となった。

若林農相は農水省内で開いた就任会見で、「大臣が次々と辞任を迫られている。異常事態と申し上げていい。しかし、農政の課題は参院選で争点となった農政改革や国際交渉、食品の安全・安心など幅広い。これらに誠意をもって対応することが求められている。停滞は許されず、全力をもって任務を全うしたい」と抱負を述べた。このほか、農業の体質強化と農・漁村の活性化を車の両輪として進めることや、食料自給率の低下に対しては、日本型食生活のPRに重点を置き、コメや野菜の消費拡大や自給飼料の生産拡大、油脂の消費抑制を図る考えを示した。

また記者からの質問で、若林農相自身の政治とカネに関する「身体検査」の内容については、農林関係団体の役職に一切就いていないことや、環境相在任時に国会審議を通じて回答してきたとした上で、「非難を受けるようなことは無いと思っている。疑問や不審な点があれば、謙虚に受け止めたい」と述べた。

〔若林農相略歴〕若林正俊(わかばやし・まさとし)氏東大卒。財務副大臣、環境相を歴任。73歳。参院2回当選(長野県区)、衆院当選3回。

○ 飼料高騰を受けて10月から卸売価格を90円値上げ—TOKYO X

TOKYO X - Association(植村光一郎会長)は4日、東京・立川市の東京都農林水産振興財団で臨時総会を開き、TOKYO Xの卸売価格を現行の1kg当たり1,212円から1,302円に90円値上げすることを決めた。10月1日から実施する。飼料価格の高騰で、農家の生産意欲の低下、生産基盤の崩壊にもつながる恐れもあるため、少しでも生産サイドの負担を減らし、増頭を図るねらいだ。値上げのリスクを削減するため、組合では生産農家と連携して一層の品質向上や、10月から本格稼働するユビキタスシステム(トレーサビリティ)による安全・安心の提示、アニマルウエルフェアの確立・アピール活動を通じて、付加価値を高めていく方針だ。

具体的には、現行の枝肉引取り価格1kg当たり647円を、700円に値上げ。脂の多いTOKYO Xの正肉歩留まりを60~62%として、諸経費(122円/kg)と会費(13円/kg、1円値上げ)と加算、卸売価格は1,302円になる(=700円÷0.6+122円+13円)。同組合ではこれまで「生活に根ざしたブランド」を目指して、設立以来、一貫して生産サイドの値上げを受け付けてこなかった。値上げに当たって植村会長は「TOKYO Xは特殊な豚であり、一度生産基地を失うと、再び回復するのは困難だ。飼料の高騰に目をつむり、農家だけに負担を押し付けていけば、農家はどんどん減っていく。値上げで農家負担を軽減する一方で、付加価値を高めてゆき、流通サイドから消費者へアピールしていく」と、会員に理解を求めた。

○ TOKYO Xが値上げ、生産基盤の維持に向けて流通側が配慮

TOKYO X - Association (植村光一郎会長) が10月1日から枝肉引取価格を1kg当たり53円、正肉ベースで90円(7%増)値上げすることを決めた。原材料の高騰を受けて食品メーカーの製品の値上げが相次いでいるなか、一般に市場取引で価格が形成される畜産物で値上げに踏み切ったのは異例だ。

「TOKYO X」の出荷頭数は05年度まで着実に増加してきたものの、06年度は7,000頭と前年度並みで、同年度目標の8,360頭を下回った。さらに07年度は目標(1万30頭)の66%になる見通しだ。一方で、組合は、TOKYO Xを「生活に根ざしたブランド」を推し進めてきたため、一切の値上げ交渉には応じてこなかった。また生産スキルの高い農家への原種豚の効率的活用ができなかったことや、仕上げ飼料があるにもかかわらず育成飼料の管理基準が認定されておらず、結果的に規格外の豚が増えた—という要因もあるものの、飼料価格高騰や生産効率のリスクが生産原価に反映されなかったことが、農家の生産意欲の欠如と将来の不安につながったと指摘する。

ただ依然、消費者の価格志向が強い。ブランド豚といえども過度な値上げは消費者・ユーザー離れにつながる恐れもある。今回の値上げを決めた4日の総会でも、一部流通側の会員から「7%の値上げだと小売りでは重くなる。できれば3~4%位の値上げにならないものか」と慎重な意見もあった。逆に生産者サイドからは「指定飼料の価格が00~01年平均に比べ1万600円も高くなっており、X1頭の生産に500kgの飼料を使うため、1頭当たり5,000円のコストアップにつながる。これを枝肉価格に反映するには67円の値上げになる。今回の値上げ(53円)で全てコスト上昇を担っているわけではない」と反論する。

飼料価格高騰を受けて、国も流通・消費者に適正に価格転嫁が進むよう協議会を開くなどして理解醸成に努めているところ。「TOKYO X」の値上げはこうした流れのひとつといえる。ただ、今回の値上げはブランド豚という特性だからこそかなう話という見方もあり、地方の銘柄豚組合では「相手(流通)側の理解があつてこそ。相手側から歩み寄りがあれば」と、値上げの願望を持ちつつも慎重な見方を持っている。

○ 8月の豪州産ラム対日輸出2.3%増の771tと増加に転じる—MLA

MLA豪州食肉家畜生産者事業団が発表した8月の豪州産ラムの対日輸出量(船積みベース)によると、同月の総輸出量は前年比2.3%増の771tとなった。焼き材需要の低迷により昨年6月以降前年割れの推移となっていたが、ようやく増加に転じた。在庫が減少傾向で推移していたことや、夏場の需要増により対日輸出量は増加に転じたものと見られる。

品目別では、チルドが24%減の500tと減少したが、フローズンは2.8倍の271tと急増した。1~8月累計では、前年比33.9%減の6,171tとなった。

豪州産ラムの対日輸出量の推移(船積みベース)

単位:t、前年比%

	07年5月	6月	7月	8月	1~8月累計
合計	1,055 (67.5)	872 (62.7)	714 (72.0)	771 (102.3)	6,171 (66.1)
チルド	721 (68.7)	656 (70.2)	592 (76.9)	500 (76.0)	4,664 (73.4)
フローズン	333 (64.7)	216 (47.4)	121 (55.0)	271 (282.3)	1,506 (50.7)